

翻刻 京都大学附属図書館所蔵『曼朱院本 萬葉集』(423/M/2 貴別) 卷一〜十

野田 香

解題

京都大学附属図書館が所蔵する『曼朱院本 萬葉集』(423/M/2 貴別)は、江戸初期の書写とされる縦三〇・七cm、横二三・二cmの袋綴冊子二〇巻で、半葉八行書きの罫紙を用い、題詞を高く、歌を低く書く。訓は、墨・朱・紺青で書き分けられ、全巻に代赭、巻一から巻二の一九六番歌までに藍青の書入を有する本である。

『萬葉集』伝本のうち、仙覚文永三年本系統のひとつに寂印、成俊らの手を経た寂印成俊本系統と呼ばれるものがある。その中でも、巻七に錯簡のない本で、今川範政が仙覚文永本に由阿相伝の本で校合を加えた禁裏御本との校合を代赭または紫で書き入れたものを中院本系統と呼んでいる。京都大学附属図書館所蔵『曼朱院本 萬葉集』は、その中院本系統の一伝本であり、『校本万葉集』では中院本系統の代表として京都帝国大学本の名称で解説されている(以下、該本を京都大学本と称する)。京都大学本に見られる書入のうち、代赭によるものは禁裏御本に由来し、藍青によるものは紀州本系統の伝本との校合に由来するものである。

京都大学本が属する中院本系統は、『万葉集』の中では比較的伝本が多く、該本以外にも谷森本(焼失)・谷森氏一本・多和文庫本・伝空性法親王筆本・岩崎文庫一本・野宮定基筆本・大島雅太郎氏所蔵本が、『校本万葉集』で紹介されている(書名は『校本万葉集』に従う)。その他にも、前田家仙覚本・宮城県立図書館伊達文庫本が確認されている。また、中院本系統と同じ寂印成俊本系統でも巻七に錯簡を持つ近衛本や図書寮一本、他系統本文を持つ陽明文庫所蔵「古活字本万葉集」や学習院大学日本語日本文学研究室所蔵『万葉集』にも、中院本系統との校合によるものかと考えられる書入が確認できるなど、中世末期から近世において、かなり流布した伝本であると思われる。

中院本系統の特徴は、禁裏御本との校合が代赭または紫で書き入れられているこ

とであるが、今は伝わらない中院本原本があり、それを直接、または間接に書写したものが京都大学本をはじめとする諸本であり、禁裏御本由来の書入はすべて中院本を経由したものであると考えられてきた。しかし、大石真由香氏(陽明文庫所蔵「古活字本万葉集」)について―校合関係に関する調査を基に―「萬葉」二〇八号(二〇一一年三月)により、陽明文庫所蔵「古活字本万葉集」の書入が、禁裏御本から直接写された可能性が指摘された。大石氏はその根拠の一つとして、中院本系統諸本巻二〇巻末の今川範正の奥書「応永廿五戊戌卯月上旬 正五位下源朝臣前上総介範政判」の「判」の部分について、陽明文庫所蔵「古活字本万葉集」が花押をそのまま写していることをあげているが、実は、京都大学本にも今川範正の花押がある。

このことは、『校本万葉集』巻一の末尾に「別紙」として「前上総介範政〈花押〉」と記載があるのだが、現在は、その別紙が巻二巻末ではなく、巻一の墨付き十一丁と十二丁の間に挟まれている。本文部分とは異なる薄い紙で、花押の部分は、輪郭をとって中を塗りつぶしており、花押を持つ奥書の署名部分を影写したものと考えられる。この別紙の存在は、京都大学本が今川範正の花押の入った奥書を持つ本と関係を持つことを示唆しているものと思われる。別紙が書かれたのが、京都大学本の書写時であるのか、伝来の過程であるのかは、判然としないのだが、書写時であれば、京都大学本の親本に花押があった可能性があり、今は伝わらない中院本原本に今川範正の花押があった可能性が出てくる。もちろん、伝来の過程で、この別紙が挟み込まれた可能性もあり、その場合は、陽明文庫所蔵「古活字本万葉集」のような本との邂逅を想定しなければならぬ。現在の所、この花押を持つ本は、陽明文庫所蔵「古活字本万葉集」と京都大学本のみであるから、この両本における禁裏御本由来の書入の関係をみていくことが、京都大学本と禁裏御本との関係、さらに、中院本系統諸本及び禁裏御本由来の書入を持つ諸本との関係を明らかにすることにつながるだろう。さらに、禁裏御本由来の書入は、完本の伝わらない仙覚寛元本の内容を反映しているとも考え

られており、その全容を明らかにすることが期待されている。

しかし、これまで、京都大学の書入を調査するのには、困難が伴った。『校本万葉集』における京都大学本の校異は新增補まで含めれば十分に詳細であるが、禁裏御本由来の代赭書入は、左右訓の入れ替え記号などが多く、具体的な書入の様子が掴みづらい。また、声点や訓点は掲載されておらず、藍青の書入についても反映されていないなど、伝本研究の立場からは不十分な点がある。それを補うように、現在、京都大学本は、全巻のカラー画像が京都大学附属図書館ホームページ貴重資料画像(<http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/index.html>)にて公開されているのだが、残念なことに、代赭書入は褪色が激しく、画像上での確認が困難な状態となっている。

そこで、国文学研究資料館 共同研究(特定研究)「万葉集伝本の書写形態の総合的研究」(研究代表者 田中大士)の一環として、京都大学本代赭書入全容の解明、また、寂印成俊本系統における京都大学本の位置づけ解明のために、全冊をカラーで翻刻することを目指してきた。その成果として、不十分な点は多々あるかと思うが、今後の研究に少しでも役立てばと考えて、ここに巻一〜十を公開する。

なお、巻一〜五については、『国文学研究資料館 共同研究(特定研究)研究成果報告書 万葉集伝本の書写形態の総合的研究 資料編』にも掲載したが、判型を原本に近いA4縦とし、各頁に頁数を入れるなど、多少の改訂を加えたため、再度、公開することにした。

(補記) 本稿の作成に当たり、リサーチアシスタントの嘉村雅江氏の協力を得た。

特に、傍訓の入力、校正作業等では大きな力となってくれた。ここに、本稿の協力者として名を記し、謝意を表したい。

凡例

一 本稿は、京都大学附属図書館所蔵『曼朱院本 萬葉集』(423)/マ/2(貴別)の巻一〜十を翻刻したものである。

二 各巻とも墨付きの部分のみを翻刻し、表紙及び遊紙は翻刻しなかった。

三 各頁に頁数及び丁数を、各歌には旧国歌大観の歌番号を付した。

四 行配置、字配りは極力原本に従ったが、罫線は反映しなかった。

五 本文漢字は、江戸期の書写であることを考慮し、積極的に異体字の認定を行い、概ね新字に統一し、「手偏」「木偏」の別や「己」「巳」の別は、本文表記が不安定であるため、歌意を優先して漢字を選択した。

六 翻刻には以下の色を用いた。

(1) 墨 (2) 紺青 (3) 朱 (4) 代赭 (5) 藍青

墨・紺青・朱による記載は、仙覚文永三年本系統の寂印成俊本の本文部分であり、紺青の訓は、仙覚によって改められた訓、朱の訓は、仙覚によって新たに付されたとされる訓である。代赭は、今川範政が仙覚文永本に由阿相伝の本で校合を加えた禁裏御本との校合による書入を転写したもの、藍青は、紀州本系統の伝本との校合による書入である。

七 翻刻には以下の記号を用いた。ただし、本稿の目的が、代赭書入全容の解明に資

することにあるため、代赭によるミセケチを重視し、原本の状態とは異なるが、対象の文字の上のせる方法を採用した。なお、声点とミセケチについては、判然としないものが多い。『校本万葉集』の記述に概ね従い、記載のあるものをミ

セケチ、ないものを声点としたが、一部、声点をミセケチに改めた箇所がある。

(1) ミセケチ、

(2) 移動記号

・ 左右の訓を入れ替える



・ 左の訓を右に移す



・ 右の訓を左に移す



(3) 異本表記  イ

(4) 合点 

(5) 声点・訓点等は原本のままに記した。

八 本稿のために、所蔵者である京都大学附属図書館より許可を頂き、また、多大なるご配慮を頂いた。ここに、謹んで感謝を記す。